

第三十六潜水艦沈没事件

1094

軍務局

大正十一年十一月十二日

吳鎮守府司令長官 鈴木貫太郎

海軍大臣 齋藤 毅

本月七日附官房機密第495號ヲ以テ御申越ノ趣ヲ

承最近ニ於ケル潜水艦ノ事故類發ニ関シハ御同様洵ニ

遺憾ニ堪ハス候旨ニテ潜水艦沈没事件ノ査問ニ

関シテハ其ノ際電報報告ノ通本職吳歸着後直ニ

査問會ヲ組織シ目下鋭意之力進行ヲ督勵致

居候條御了知相成度

右回答旁申進ス

官房機密第495號

(終)

1095

12.11.17

七〇六

大正十二年十一月十五日

吳鎮守府司令長官 鈴木貫太郎

海軍大臣 齋藤 啓

第一查問會組織ノ件

第三十六潜水艦沈没事件目下查問會ノ組織ニ

調査中ニ有之候處事件ノ概要ハ既ニ吳鎮守府密實

七八六號ヲ以テ吳鎮守府潜水隊司令報告書寫シ進達

致置候條右ノ御了知相成度查問會規則第一條依リ

右報告ス

(終)

1096

12.11.20

第七十番水龍橋ノ發生以來未タ西三月ヲ出テヤルノ諸水龍ノ周
 々ノ故類蒙スルト已ニ四回ニ及ビハ是等ノ事故ニ付テハ未タ先
 台審理ノ詳報ニ據セテ以テ其ノ原因ニ付テハ判断シテ下レ事ハ
 事ハ柔員技師ノ未熟又ハ阻強ト起因スルヤ推察セラル、
 有クハ向ノ寒心ニ堪ヘン功アリ、
 諸水龍ノ元實者蓋シ、既ニ努力ヲ拂ヒコトコトハ、際、斯ノ如ク類
 々トシテノ事故、遠出スルヲ見テハ之カ改善ハ一日シ曠クカカラン、重大ノ向
 題ニ有クハ有エン身如ク海シテ諸水龍界ノ整頓事ヲ漸行シ有形無
 形共ニ福杯ソ艾際スルツ刻下ノ急務ト思ヒテハ付テハハ、次實行
 案下ニ控ケン、第二十六番水龍沈没ノ件ニ付テハ、成シ得ン限急案、
 査メツ進メテノ故ノ真因ヲ究明セラルト共ニ、
 是備事別決之カ事ニ付テハ、即意見詳報ニ呈送スル事報
 牛様御交

大依命申述

卷之三

第七十番水

河原崎波

第六十九番水

清水之際

第六十八番水

島田之原

第六十七番水

廣島海

第六十六番水

香取之原

勘案紙

(3)

18.2.19 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

18.2.14 受

大正十五年十二月六日

吳鎮守府司令長官 鈴木貫太郎

海軍大臣 野村浩将 殿

第一課 査問ニ関スル件

第三十六潜水艦沈没事件査問會委員長

法務局

ヨリ別紙通り査定申報有之本職之至當

ト認メ同艦長及水雷長職務執行者ニ對シテ

ハ刑事訴訟ヲ爲シ其他ノ責任者ニ對シテハ相當

懲罰處分可致候

右報告ス

人事局

別紙査定第一書類一摺係付

法務局受

1101

大正十二年十一月二十四日

第二十六潜水艦沈没事件査問委員長 立野徳治郎

呉鎮守府司令長官 鈴木貞太郎殿

一、第二十六潜水艦沈没事件査問關係書類

一 括

二通
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

石 提 出 ス

（終）

七ノ六ノ二

海

第二十六潜水艦沈没事件査定書

第二十六潜水艦沈没事件ヲ査定スルトヨリ左ノ如シ

第一、事實

一、遭難當時ノ實狀

(一)魚雷發射ノ際事故發生ノ狀況

第二十六潜水艦ハ大正十一年十月二十九日海軍潜水學校教務
魚雷發射ヲ廣島灣津久根射場ニ於テ實施中ニ番發射
管門扉開閉裝置故障ニテ門扉半開、儘セララ覺ラスニテ
發射セタメ南雷頭部門扉後端ニ喰ヒ込ミ射出不能トセリ
當時、發射ハ水上狀態九十度、斜進發射ニテ魚雷ハ
潜水學校ニテ使用セテ調製並發射管、操作ハ全部同
艦發射管員ノ手ニテ實施シ潜水學校練習生、該作

ヲ見準セリ當時掌水雷長職務執行者タル衆組兵科
特務士官員中ナリシヲ以テ水雷長職務執行者タル緒方
同艦先任衆組尉官水雷室ニ在リテ發射ヲ監督ス戰闘
ノ令ヲ發射管員ニ發射機長タル江藤一等兵曹ノ令ニテ
前扉ヲサレテ開キ管内ニ満水スルヲ待テテ同扉ヲ全開ス同
兵曹ノ前扉全開ノ指標ヲ確ク門扉開閉指示裝置ノ指
標ハ「危險」ノ方ニ近クシテ「安全」ヲ示ササルニ係ラス從來該
裝置ノ不完全ナル場合アリシヲ念頭ニ置キ指標「安全」
位置ニアルニモ門扉ハ全開シアルニト誤断シ「三番發射管
宜シト報告」當時緒方先任衆組尉官ノ位置ニ潜水
學校練習生ヲ集合スル後方ニテ直接指標ヲ確ルニ能
ハセシヲ以テ特ニ安全裝置ニ宜シキヤト反問スルニ同兵曹「宜
シキヤ旨報告セリ發射之際ニ魚雷ハ射出スルニシテ發射管

内止マリ推進器ノ空轉セルヲ聞ク依テ發射ヲ中止シ繼外
ヨリ發射管ノ状態ヲ調査セテ前記ノ如キ狀況ニテ到底
現場ニ於テ魚雷拔出ノ見込立タサレテ以テ魚雷ハ其儘ニ
發射管ニ當番ヲ附シ魚雷ニ注意ニツツ歸港セリ

(三) 魚雷ノ故障ノ對スル處置

緒方先任乗組尉官ハ發射機長タル江藤一等兵曹ノ建言ヲ
參考トシ入港緊留後艦ノ前部諸「タ」ヲ排水ニ成ル可ク
前部吃水ヲ減シ前部六十呎即筒ヲ以テ發射管内ノ海水ヲ
排除シ發射管後部ノ海水ヲ全部排出シタル後猶短時
間即筒ヲ作動セシメ魚雷後部ノ空氣圧力ヲ減シ暫ク
其ノ狀況ヲ檢シ魚雷後方ニ推移セシメ徐々ニ後座ノ緊締
螺ヲ緩メ浸水ノ模様ヲ檢シ安全ナルヲ確認セバ徐々ニ後座
ヲ開キ更ニ魚雷及浸水ノ狀況ヲ檢シ異狀ナキヲ認ムル同

廊中央、防水栓ヲ除去シ其ノ小孔ヨリ曳索ヲ導キテ魚雷
尾部縛着シ後廊ヲ閉鎖シタル後曳索ヲ張リテ魚雷ヲ
發射管内ノ定位・復セシメトスルノ計畫ヲ立テ其ノ要領ハ
津久根射場ニ於テ河野艦長・報告ハ同所ニテリシ朝技司
今該作業ハ入渠モナリ決シテ輕々ニ着手スルキモニアリ
ル旨ノ意志ヲ發表セルモ拔出作業ニ對スル考案無クシカ
處置・ツキ決心ツカサレテ以テ自己ノ意志ヲ部下ニ徹底
的ニ示スヲ得スレテ歸港セリ朝技司今同日午後二時十分
歸港繫留ヲ終ルヤ會新二十五潜水艦長着任タメ母
艦千代田ニ在リテ司令・歸艦ヲ待チツツテリシ際尤テ以テ
母艦千代田・越ケリ河野潜水艦長モ亦先任艦長トシテ
旧二十五潜水艦長ノ退艦事務ヲ處理スルタメ當日、當直
將校タル緒方乘組先任尉官・魚雷拔出作業等後事ヲ

此レ用事終リ次第歸艦、意志ヲ以テ司令ト同行千代田ニ
趣ケリ朝技司令ハ魚雷拔出作業、着手スル事實現ヲ
知ラサリシヲ以テ艦長カ艦ヲ離ルルニ就テハ何等懸念スルトコロ
ナカリキ午後二時三十分ヨリ緒方先任兼組付官ハ發射機長ハ
藤一等兵曹以下七名、發射管員ヲ監督シ前記計畫ニ
基キ魚雷拔出作業、着手セリ豫定ノ如ク艦内前部諸
「タン」ヲ排水シ是レカタノ前部吃水ハ十呎六吋トナリ三番
發射管口中心ハ水面下約二呎六吋トナリ次ニ前扉ノ開
閉手輪ヲ閉シ二回轉シ魚雷頭部ヲ前扉ヲ以テ一層強圧
魚雷ノ後退、對スル摩擦ヲ大ナラシメントシ一方維持針
ヲ發射管内ニ出シ後退ノ萬一ニ備フ次ニ前部六十噸汚
水唧筒ヲ發動シ發射管内海水ヲ排除シ發射管後
部海水全部排除シタル後更ニ約十五分間後扉閉鎖

儘六十噸脚筒ヲ作動セシメ管内ノ状況ニ注意シタル魚雷後退ノ形跡ナキヲ以テ徐々ニ緊締螺ヲ緩メ浸水ノ状況ヲ檢シタルニ魚雷ト發射管トノ間隙ヨリ浸水ハ極メテ少量ナリレヲ以テ後扉ヲ半開シ魚雷ノ狀況ヲ檢シタルニ魚雷ハ約一米前進ノ位置ニ止マリ居レリ尚約五分後扉閉鎖準備ヲナシツツ注視シ居タルニ何等異狀無キヲ以テ安全ナリト確信シ後扉ヲ全開シ魚雷推進器止ノ嵌合ヲ準備ヲナシツツ實際午後三時二分魚雷ノ豫期ニ反シ突然急速度ヲ以テ後方ニ退却シ管外ニ出テ水雷室甲板ニ跳出シテト同時海水ハ發射管ヨリ濺ル如ク艦内ニ奔入セリ

三 處置

魚雷艦内跳出シ海水發射管口ヨリ奔入スルヤ緒方先任乗組尉官ハ自ら以テ發射管員ト共ニ極力後扉閉鎖ニ從事

スト同時ニ水雷室内浸水排除ノ目的ヲ以テ後部六十噸唧筒ノ發動及防水扉閉鎖ノ令ヲ下ス管員ハ後扉閉鎖ニ死力ヲ盡シタルモ足場悪ルヲ意ニ任セス間隙約一吋迄閉鎖シ得タル場合アリシモ後扉閉鎖用緊締螺ヲ懸クルニ至ラス海水ハ間隙ヨリ激シク浸入ス之ト同時ニ前扉ノ閉鎖ニ努メシノタルモ前扉閉鎖用手輪ハ後扉閉鎖セザレハ充分ニ山嵌合セシムコト能ハサル機構ナルヲ以テ之レ亦閉鎖不可能ニテ浸水ハ刻々ト増加セリ浸水量ノ増加ニ連レ艦ニ俯角ヲ生シ發射管後方ノ溜水約三呎ニ及ヒ作業甚ニ困難トナリコト時既ニ海水ハ水雷室ヨリ隣室士官室ニ浸入シ到底後扉閉鎖ノ見込無キヲ以テ之レヲ断念シ發射管員ハ隣室士官室ニ移リ水雷室ト士官室間ノ防水扉閉鎖ニ從事セシニ恰モ後扉全開タル浸水頗ニ加ハリ衣服

箱附近手拭櫃ノ手拭其ノ他浮流物間隙ニ流レ込ニ
妨ケレテ作業意ノ如クナラス漸ク間隙約一可迄ニ閉鎖セ
時海水ハ己ニ胸及ヒ海水電池ニ浸入シタルタメノ事ニ
斯ク感ス此時既ニ士官室ノ前端ニエ前部昇降口
ヨリ浸水セントシ艦ノ前方傾斜加リ全ク危険状態トセリ
事件發生當時在艦者中次席將校タル杉浦後任乗組
尉官ハ更衣ノタメ士官室ニアリタルカ發射管ヨリ浸水ト見
ルヤ直ニ上甲板ニ出テ隣艦ニテ潜水艦當番ニ本艦發射
管ヨリ海水浸入スル旨千代田ニ在ル司令艦長ニ信號ス可キ
ヲ命レ置キ艦内ニ入ル此時恰モ發射管員ハ士官室ニ
退却シ水雷室士官室間ノ防水扉閉鎖ニ從事シツツ
エ際ナリシヲ以テ自ラコレカ作業ヲ補助シツツ他ノ防水
扉閉鎖ノ令ヲ傳フ此時二次電池ニ浸水シテタロリシ

瓦斯發生、微候テリ附近落解線、焼失スルモ、元ヲ
認メ急遽上甲板ニ出テ主電路切斷器、切斷ヲ機関
部先任者、令シ再ニ艦内ニ入レリ當時士官室ト兵員室
間、防水扉ハ完全ニ閉鎖サレタモ水雷室ト士官室間
ノ防水扉ハ完全ニ閉鎖セサリシヲ以テ前部昇降口ヲ閉
鎖セ、士官室ヲ前方ト兵員室全部ヲ死地ニ陥ラシムル
モノシラ以テ之レカ閉鎖ニツキ考慮ミツクアル間ニ浸水亦算
ニ増加シ前部昇降口迄海水來ルヲ以テ到底防水不可能
ニシテ艦ハ沈没ヲ免カサル能ハサルト覺悟シ艦橋ニ至ル
此時緒方乗組先任尉官、現場ヲ指揮シ過防、結
果死亡ト人事不省瀕死ノ状態ニテ前部昇降口ヨリ
助ケ出サレシ状況ナルヲ以テ杉浦後任乗組尉官ハ緒方
先任乗組尉官ノ意志ニ添フモノト信シ艦橋傳聲管

ヨリ艦内ニ「総員上ヘ」令ヲ下セリ此、時既ニ主電路切斷居ハ切斷セラシ艦内ハ暗黒トナリ此、令ニテ前部作業員ハ前部昇降口ヨリ中部作業員ハ司令塔昇降口後部作業員ハ機械室昇降口ヨリ上甲板ニ出ツ杉浦後任乗組尉官ハ尚艦橋ニ止マリテ該昇降口ヨリ乗員ハ大部ヲ收容シ終リタルヲ見テ一度昇降口蓋ヲ閉鎖シタルモ尚乗員、艦内ニ在ル者アルヲ聞キ該昇降口蓋ヲ再ニ上方ヨリ開キ残留者ニ名ヲ收容ス間モ無ク艦ノ前方傾斜次第ニ加ハルト共ニ艦ノ浮力次第ニ減シ海水ハ艦橋昇降口ヲ浸サントスル状況トナリシヲ以テ艦橋ニ在リシ乗員ト共ニ艦橋ヲ退キ艦尾ニ至リ一旦乗員ノ手ニテ通船ニ助ケ乘セタル緒方主任乗組尉官ハ稍元氣ヲ回復スルト共ニ自己ノ責任ノ大ニ

ヲ感シ勇ヲ鼓シテ再ニ艦ノ後方ニ乘艦ス一方艦ノ傾斜
ヲ千代田上甲板ヨリ目撃セ同艦當番ノ疾呼ニ應ジ
同艦士官室ニ在リテ朝技司合ハ魚雷抜出作業中ノ
諸誤ニヨリ發射管ヨリ浸水セシメテ直感ニ事態
ノ容易ナクサレテ覺リ急遽同艦舷門ニ横附中ノ帆布
艇ニ乘シ河野潜水艦長ハ一足邊ニテ通船ニ乘シ共ニ
現場ニ急行ス司令艦長ハ共ニ途中ニテ前部昇降
口迄海水ノ來タルヲ認メ水雷室防水扉閉鎖セ居ラハ
該昇降口ヲ閉鎖シ艦ハ沈没ヲ免ヌガルト得可ト信
シ短艇中ヨリ該昇降口ヲ閉鎖シ數回疾呼セテ司令
ニ次テ一ニ分邊ニテ艦長到着來艦ス此時艦ハ既
ニ著シク前方ニ傾斜シ艦首ハ既ニ海底ニ觸レルカ如
キ状況ナリシヲ以テ朝技司合ハ到底艦ハ救フ可クモ下ラス

覺悟し尚艦内に乗員を残留せしむるヤラ顧慮し
上甲板へ上せし命令下此時海水は既ち後部機積室
昇降口迄來たり該昇降口ヨリ最後乗員ヲ收
容せし時既に海水該昇降口ヨリ艦内に浸入せる状況
ナレヲ以テ艦を止むルノ危険ナラ認メテ総員退去ヲ令シ
総員ヲ通船・收容セル後司令艦長ニ退艦し通船ヲ移
リ人員ノ調査ヲ行ヒ乗員全部ノ異狀無キヲ確ルル
ト共ニ二十六潜水艦ノ沈没救助ヲ要スル旨ヲ鎮守府ニ
信號ス爾後浸水益々加リ午後三時二十三分艦尾水中ニ
没シ艦は全ク沈没シ終リ又

ニ沈没當時ノ第二十六潜水艦ノ状況

引揚後ノ調査並乗員ノ訊問ヨリ判断スルニ沈没當時
ノ艦ノ状況次ノ如シ

(1) 三番發射管前扉後扉開放、儘

(2) 水雷室ト士官室間、防水扉開放

(3) 前扉門扉開閉閉聯裝置、縱軸、螺釘三個脱落

シタノニ該軸、移動シ之レカタノ前扉ハ完全ニ開閉セラル

モ門扉ノ開閉ハ不確實ニシテ且ツ門扉開閉指示裝

置、作動完全ナラス(現場写真参照)

(4) 士官室ト兵員室間、防水扉ハ確實ニ閉鎖セシ通風

管隔壁余ニ確實ニ密閉セタリ

(5) 士官室ト兵員室間、外防水扉及通風管隔壁

余ハ閉鎖確實ナラス

(6) 通風筒主機排氣弁等ハ閉鎖ニ形跡無シ

(7) 各昇降口蓋ハ單ニ外方ヨリ閉鎖、位置ニナシタル儘ニテ

外方ヨリ緊締裝置ナキ爲密閉セラス

第二 沈没ノ原因

一、三番發射管故障魚雷拔出計畫並實施、適當

ナラサリシコト

二、發射管ヨリ海水浸入、降水雷室ト士官室間、防水扉閉鎖レ能ハサリシコト

理由

三番發射管故障魚雷拔出作業中魚雷ヲ發射管内ヨリ抜き出サントシテ後扉ヲ全開セル際突然魚雷後退繼發射管外ニ飛ビ出シ海水ハ該發射管口ヨリ艦内ニ奔流シ發射管員ハ緒方先任乗組^{兵科}尉官指揮、下ニ極力發射管前後扉ノ閉鎖ニ努力セシモ及ハス緒方先任乗組兵科尉官ハ前後扉ノ閉鎖到底不可能ト見ヤコレヲ見捨テ水雷室ト士官室間、防水扉閉鎖ヲ

令シタルモ時機既ニ遅シ諸浮流物ニ妨害セラレテ閉鎖意
ノ如クナラス浸水量増加ニ連レ艦ノ浮力減少スルト共ニ前方
傾斜ヲ増加シ前部昇降口ヨリ浸水スルニ至リ次テ士官
室ト兵員室間ノ防水扉通風管隔壁弁ハ閉鎖サレ
シモ水雷室ト士官室間ノ防水扉ハ閉鎖サレシヲ以テ作
業員ハ命ニヨリ前部昇降口ヨリ艦外ニ出スツ浸水次第ニ
増加シ水雷室ト士官室ニ満水スルヤ艦ハ浮力船ノ浮力量ヲ失
失ヒ次テ上方ヨリ閉鎖セシモ外部ヨリ緊締不可能ナル司令
塔昇降口機械室昇降口ヨリ海水艦内ニ浸入シ沈没
ヲ速カクシメタルモノナリ

第三 責任ノ歸屬並其ノ程度

一 第二十六潜水艦乗組海軍大尉緒方勉

同官ハ大正十二年十月二十九日同艦水雷長職務執行者

シテ同艦三番發射管發射ノ際門扉前扉開聯裝
置故障、多ク魚雷門扉後端ニ喰ヒ込ミタルヲ以テ前記魚
雷拔出作業計畫ヲ立テ艦長、兼認ヲ經テ同日午後
二時三十分ヨリ直接發射管員ヲ監督シ魚雷拔出作
業ニ從事セシカ後扉全開ノ際魚雷ハ豫期ニ反シ後
退シ發射管口ヨリ艦内ニ浸水スルニ至ラシメタリ
察スルニ該作業ノ如キ一度誤ラシカ直テ艦内ニ浸水艦ノ
保安ニ関スル重大事ニシテ極メテ慎重ナル計畫ヲ要シ
又之レカ實施ニ當リテハ深甚ノ注意ヲ拂ヒ豫メ浸水ヲ
防止スルノ手段ヲ講スルニキニ漫然魚雷門頭部一吹以上門
扉後端ニ喰ヒ込ミ魚雷ノ容易ニ后退スルカ如キ事無
カ可シト憶斷シ魚雷后退ニ對スル手段ヲ盡サシテ
前扉開扉ノ儘后退ヲ開カ如キ杜撰危險ナル計畫

ヲ立テ實施ニ當リテハ魚雷ハ後退セサル可シトシ考先
入主トナリ水雷室ト士官室間、防水扉閉鎖、準備ヲ
サエナササリシ如キハ浸水ノ際ニ於ケル手段ニ就キ充分ナル
考慮ヲ拂ハサリシモノナリ又發射管ヨリ浸水シ前後扉
ノ閉鎖到底不可能ト見ル速カ水雷室ト士官室間
ノ防水扉ヲ閉鎖スハカリレシ其ノ時機ヲ失シ遂ニ同艦ヲシテ
沈没ノ厄ニ陥ラシメタルモノニシテ其ノ所爲ハ刑法第百二十
九條ノ第二項ノ罪ニ該當スルモノト認ム而シテ同官ノ採
リタル處置ハ適當ナラザリシトハ云ハ浸水ト見ルヤ能ク
卒先身ヲ以テ後扉ヲ防水扉閉鎖ニ努力シ海水胸
ヲ浸スニ至リテ始メテ人事不省ノマ前部昇降口ヨリ
助ケ出サレ通船ニ移セタルモ自己ノ責任ノ大ナル氣付キ
再ニ乗艦シ最後迄最善ノ努力ヲ致セシハ當水雷

長缺員ニシテ自ら細部ニ涉リ監督ヲ要シ多忙ナリ
事ト共ニ情狀酌量スヘキ點ナリト認ム

ニ 第六潜水艦長海軍大尉河野靜雄

同官ハ大正五年十月二十九日同艦水雷長職務執行者
海軍大尉緒方勉、計畫ニ係ルニ三番發射管故障
魚雷拔出作業計畫ヲ承認シ該作業、實施ハ緒
方大尉、監督ニ任シ事件發生當時、母艦千代田ニ
在リテ直接該作業、實施ニ関共セズ同潜水艦
ノ危険ニ瀕セルヲ同撃手セル千代田當番、疾呼ニ應ジ
急遽現場ニ到着乘艦セシモ時機既ニ遅ク策、施ス
可キモノ無クシテ艦ハ沈没スルニ至レリ案スルニ同官ハ同
艦沈没ニ至ラシメタル浮力釣合、七矢ニ對シテハ直接
其ノ責ニ任ス可キ筋合ニアラザルカ如キモ艦ノ保安、責

ヲ有スル同官カ部下、進言ヲ容レ危険不用意ナル魚
拔出作業ヲ計畫實施シ因テ同艦ヲ沈没ニ至ラシメ
タルモノニシテ其ノ行爲ハ刑法第百二十九條、第二項ニ
該當ス魚雷拔出作業ハ一度謀ラシカ忽シ艦ノ保安
ニ關スル重大作業ニシテ自ラ在艦監督ノ責ヲ有スルニ
係ラス緒方先任乗組兵科尉官ニ一任シ母艦千代田ニ
在リタルハ艦長トシテ其ノ職責ヲ全フシタリトハ認ル能
ハス

三、以上ノ外第二十六潜水艦沈没事件ニ關スル責任者ナシ
四、第一潜水隊司令海軍中佐朝枝三藏

同官ハ大正五年十月二十九日司令潜水艦タル第二十六潜
水艦カ魚雷發射ノ際三番發射管故障ニテ魚雷
射出不可能ノマ、歸港セシメ魚雷拔出作業着手、

時機並計畫圖、細目ハ之レヲ知ラスレテ入港繫留後
母艇千代田ニ趣キ事件ノ發生當時ハ在艦セズ母艇
千代田當番、第二十六潜水艦危険ニ瀕シツツアル旨、
疾呼ヨリ急遽現場ニ到着乘艦セルモ時機既ニ遅
シ施ス可キ手段無クシテ遂ニ艦ハ沈没スルニ至レリ右、
行爲ハ本艦沈没ノ原因ニ對シテ、其ノ責ニ任スルヲ筋
合ニアラサルモ射場ニ於テ緒方先任乗組兵科尉官ヨリ
魚雷抜出ニシテ河野潜水艦長ニ届出テアリシ際同所
ニアリシ同艦カ該作業ハ入渠モノナリ輕々ニ著手スルキ
モノニアラストノ意見ヲ表明セルモ之ヲ部下ニ徹底セシ
ムルノ手段ヲトラス又浸水ニ際シ乗員ノ進退處置
當ヲ得サルモノアリシハ同艦防水部署、不備並教育
訓練ノ不足ニ起因スルモノニシテ之カ責ヲ有スル司令ト

シテ其ノ職責ヲ全フシタルモノト認ムル能ハス海軍懲罰
令第九條第二十七號ニ該當スルモノト認ム

大正十二年十月二十四日

査問委員長 海軍大佐 立野徳治郎

査問委員 海軍中佐 松岡 雄

査問委員 海軍中佐 木内達藏

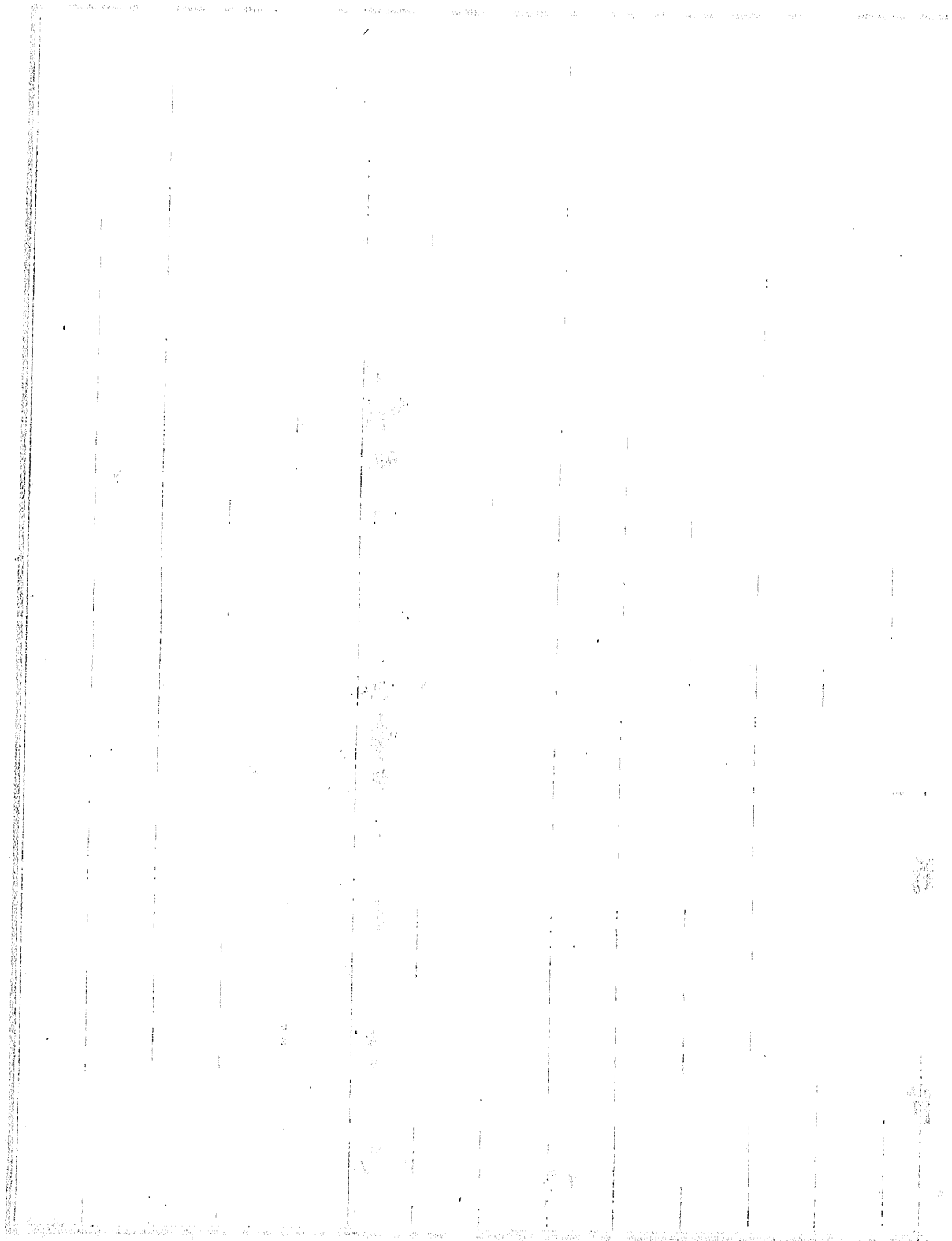
査問委員 海軍機關中佐 高野子虎太郎

査問委員 海軍少佐 澤野源四郎

査問委員 海軍少佐 春日 篤吉

査問委員 海軍造船少佐 鈴木恪司

査問委員 海軍法務官 加古哲太郎



1124

第二十六潜水艦沈没事件ニ関スル所見並ニ將來參考トス可キ事項
(一)人事關係

一 乗員ノ訓問並ニ引揚後調査セル結果或ハ通風筒ノ閉鎖充分ナリ
ルモノアリ主機械排氣弁各室通風管長隔壁一人等閉鎖ニヨリ如キ
等ハ電動機室主機械室間ノ防水扉ノ閉鎖確實ナラザルガ如キ先任
兵科乗組尉官以下発射管作業ニ従事セル数名ノ有テ除キ各
自其ノ部署ヲ完全ニ遂行シタリトハ認めル能ハス之ト主トシテ公艦防
水部署ノ社稷ヲト訓練充分ナラス加フルニ作業中間モ無ク総員
上ヘノ命アリシニヨルトハ云ヘ奮闘努力己ノ取善ヲ志シ且取後迄其ノ
守所ヲ離ラズ艦ト運命ヲ共ニスルノ氣慨ヲ示スモノ少ナカリシハ帝
國海軍ノ為誠ニ遺憾トスル所ナリ

本件ニ関シ左記朝坂司令ノ所感ハ参考トスルニ足ルモノト認めム
潜水艦乗員ノ士氣ニ関シテハ瀕水艦其ノ者ノ性所具上常ニ之レガ緊張
ヲ要スル見地ヨリ本年初頭ヨリ志川第十五潜水隊司令ト協力之ガ
挽回ニ勉メ鎮守府ノ了解ヲ得テ下士官兵ノ上陸訟ヲ改正シ准士官
以上ノ當面法ヲ定メ嚴格ニ実施シ兼テ愛艦心ノ養成ニ勤ムル所アリ
タルモノト回事件ニ當リ士氣ノ十分ナル発揚ヲ認めサリシハ類ル遺憾ト

スル所ナリ此レ豫ク潜水水艦乗員ニ付ム可ニアラズシテ剛健イラザレ國民
精神ノ大勢ニヨリ支配サレタル結果アルヲ認ムル軍縮政策理ヲ機トシ
全海軍ヲ通シ一齊ニ之レガ登場ニ関シ最善ノ処方ヲ研ハサルベカラ
サルモノト認ム

二 潜水艦乗員ニハ技術優秀犧牲的精神旺盛アルモノヲ撰拔スルヲ要ス
特ニ進士官以上ニ於テ然リトス

三 潜水艦ニ在リテハ進士官以上ノ欠員ハ直ニ補充スルヲ要ス

潜水艦ノ如ク進士官以上ノ定員少キ所ニテハ一名ノ欠員モ其ノ影
響大ナル所甚スナリ第ニ十六潜水艦ニ於テ事件發生當時掌水雷
長職務執行者タル特務士官ノ配属人員アリシハ本事件ニ関係
少キカラザルモノト認ム

四 潜水艦職員ニ主計官(進士官)ヲ差支テシテ定員ク置クヲ要ス今四ノ事
件ニ於テ直接ノ責任者タル水雷長職務執行者ガ発射機ノ検査
ヲ怠リタルハ陳述ノ際緒方大尉ノ告白セル如ク令士官ハ庶務主任
ニシテ會進級具申ノ際ニシテ事務多忙ナリシニ依ル一般ニ乗組尉
官ニ庶務ヲ擔當セルハ本務遂行ヲ妨害スルコト甚クシク

五

潜水艦ノ乗組將校ハ中尉ノ為参考者又ハ大尉ヲ以テスルヲ要ス
余リ若キ中尉若ハ少尉ハ艦務ニ不馴ミテ作業上ノ監督不允分
クモアリ准士官任トテ下士官兵ノ教育指導上ニモ充テテ此ノ点
ヨリ考フルモ潜水艦ニ採用スヘキ兵科機関科將校ヲ軍艦駆
逐艦ニ通経驗ヲ有スル中尉ヲ採用スルヲ要ス

(二) 教育関係

一 方今潜水艦ト云ハス機構上ノ知識ノ欠乏ハ青年海軍士官ノ通
帯アリ之レ學校教育上考慮ヲ要スル所ナルト共ニ其基本部ニ充
テモ乗組士官ヨシテ一層艦内ノ事ニ親シミタル如ク教育指導ニ要ス
潜水艦教育ハ一層実地教育ニ重点ヲ置キ實際ニ役立ッ人
物ヲ養成スルヲ要ス之レガタメ潜水艦學校實習潜水艦ノ隻數
ヲ增加スルヲ要ス

三

防火防水ノ如キ一艦ノ保安ニ直接関係見教練ハ屢々訓練ヲ重
之レガ実施ニ當リニハ形式ニ流ル、事ヲ要ス第ニ十六潜水艦ニ
在リニ此ノ点ニ於テ遺憾ノ点多シ

(三) 艦政関係

一 工作上不可能ニアラサル限り苟モ取扱者ニ對シテ不安ノ念ヲ隱シタルガ

(三) 艦内
(四) 艦外

防空射撃装置
艦内無線電機
艦外無線電機
艦内無線電機
艦外無線電機
艦内無線電機
艦外無線電機
艦内無線電機
艦外無線電機
艦内無線電機
艦外無線電機
艦内無線電機
艦外無線電機

如キ事ハ絶對ニ無カラシムルヲ要ス潜水艦各區劃ノ水密ニ就テハ危
懼ノ念ヲシトセズ之レケテノ乘員ハ信賴シテ守所ニ傍リテ得ザル可
各區劃ノ氣密試驗ノ如キ一層嚴重ルヲ要ス
河野第三六潜水艦長提令セテ所見中差誤三項ノ如キ這
般ノ状況ヲ伺フニ足ル好資料ナリ認ム

本艦沈没ノ際士官室ト兵員室間防水隔壁ニ電線ノ通路ラシ
キ一穿孔アルヲ発見セリ

本艦浮上排水ノ際機械室殘水ヲ排去セルニ合時ニ電動機室殘
水モ排除セラレ西區劃間ノ防水隔壁ハ下部ニ於テ水ノ交遊
スル又ノ間隙アルコトヲ知レリ

工廠各部ノ工事分坦區分ニ就キテハ尚研究改善ヲ要スルモノアリ
シ型ニ於テ是射撃官前扉及門扉ハ相關聯セルモノナルガ前者

ハ水雷部主務后者ハ造船部所掌トス然レ西區劃一方ヲ修理ス
ルニ當リ場合ヨリテハ他方ニ手ヲ加フルノ必要ヲ生ジ且他ノ所掌

部ノ修理ヲモ為スコトアリ最近ニテ六潜水艦入渠ノ時門扉修
理ハ水雷部職工ノ手ニテ施行セラレタリ如キ密接ノ關係ヲ

有スル部々ハ同一部所掌トスル如ク又事分坦表ヲ改正スルヲ要ス

三 重要部立事ニ層々念確実ニ施行スルヲ要ス

ニ作廠等工事ノ施行中ハ其ノ擔任者ヲ其任ヲ以テ之事ノ完全ヲ期シツルハ勿論ナランモ今回ニ十六潜水艦門扉閉閉用ノ事

装置ノ離脱等ヨリ安ホスモ工事ノ稍々不完全ナリシヤノ感ナキ

能ハズ依テ將來ハ今回ノ実績ニ鑑ミ工事上一層ノ注意ト監査トヲ勵行シ工率ノ完全ヲ期スルヲ要スルモト認ム

四 一等潜水艦ヲ入渠セシメ得ヘキ手輕ナル浮船渠ノ必要ヲ認ム
一 艦裝兵寇關係

一 一型潜水艦ノ前扉ト門扉トノ閉連裝置並ニ門扉安全裝置ハ改造スルヲ要ス

一 型潜水艦ノ門扉前扉閉連裝置ハ薄弱ニシテ乗員ノ常ニ懸念ニ堪エガリシ事ノ陳述録取書並ニ艦艇使用實驗

報告ニヨリ明クナリ今回ノ事故ノ如ク若シ實戰ノ場合ニ惹起シテ

除該裝置ノ改造ハ是非共斷行ヲ要スルモノト認ム
思フニ本計畫ガ英海軍採用ノモノト全然合一ナリトシ彼ニ故障ナ

國連裝界ニ行シ
四部ノ意見ヲ求メ
口實等ヲ現行
ハ可成リト思フ

五、聖域の海軍建設
 六、海軍の整備
 七、海軍の教育
 八、海軍の訓練
 九、海軍の衛生
 十、海軍の福利

四

吾ニ故障アリセバ欠陥ノ原因必クモシモ計画上ニテラズシテ寧ろ口ニ作
 上ニテト認ルカ至當トスヘシ殊ニ第一ニテ六潜水艦ハ本年九月五日
 深雷時今面ノ故障ノ個所ハ完全ニ修理セラシルニ爾後ニテ月足
 ラスノ日子ニ於テ廣島灣仔豫灘方面ニ普通ノ天候ニ於テ三十
 数回ト動シ夫ガタノ此ノ結果ヲ來シタリト云フニ級着ス斯ノ如
 ハ使用者シテ誠ニ心細キ次島ニシテ工作廳ニ對シ是等潜水
 艦ノ工作上ニ對シ一層ノ注意ヲ希望スルト共ニ根本計画ニ對シモ
 充分ノ研究ヲ重ク使用者ニ於テ安シテ使用シ得ル程度
 ノモノニ改造ヲ切望スルモノナリ
 昇降口蓋ハ上甲板ヨリモ容易ニ閉鎖緊定シ得ル装置ヲ必要ニ察
 防水扉附近ニモ移動脱落シ易キモノヲ艦装セザルコト
 急速防水扉閉鎖ノ際間隙ニ概マリテ閉鎖不確ニ実トナリシ
 例屢々ナルヲ以テ防水扉附近ニハ艦装ヲナラザルコトニ定ムル得
 又ノリヤールヲ要ス
 移動燈用電纜ハ室内用ノモノハ長キ短クシテ具ツ移動燈用ノモノ
 ハ上部ニ二例所以上ラツクルヲ要ス 移動燈用電纜ハ使用ノ
 目的ヨリ相當長キ電纜ヲ必要トスルモノアルモ室内用トシテハ

(五)

其ノ他

其ノ室内ノソケットニテ使用可能ナル程度ニ短クシ他室ヨリ防水扉ヲ越ヘテ使用スルガ如キコト無カラシムルヲ要ス即チ該電纜ノ多急場ニ際シ防水扉閉鎖ノ妨害ヲケストニアリ今更ニ水雷室防水扉閉鎖ノ際ニモ此ノ例アリ又移動燈用ノソケットハ水雷室ニテ所以上上部ニ設クルヲ要ス

- 一 潜水艦部署標準ニ並ニ教範ハ近ク發布セラル、然レリト云フモ此ノ際至急實現ヲ要ス
- 二 部署ノ認許ノ際シテハ潜水學校ノ如ク諮問機関ヲシテ調査セシメラル、ヲ便トス

(終)

証憑書類

- 一 第一潜水艦沈没事件報告(第一潜水隊司令提出)
- 二 陳述録取書
- 三 第二潜水艦部署沿革
- 四 第二潜水艦艦艇使用實驗報告沿革
- 五 第二潜水艦教育記録沿革
- 六 第二潜水艦各潜水艦發射管從來故障並修理狀況及現狀(河野第二潜水艦長提出)
- 七 第二潜水艦三番發射管前門扉開閉裝置現狀見取圖並寫真
- 八 故障魚雷頭部寫真
- 九 第二潜水艦沈没對スル計算

(終)

第十一潛隊機密第五七號

大正十二年十月三十一日

第十一潛水隊司令 朝枝三藏

吳鎮守府司令長官 鈴木貫太郎殿

一、第二十六潛水艦沈没事件報告

右提 出 ス

(別紙添)

(終)

第二十六潜水艦沈没事件報告

第十一潜水隊司令 朝枝三藏

一、本職ノ指導監督不行届ノタメ一大不詳事ヲ惹起スルニ到リシハ誠ニ恐懼ニ堪ハス
二、潜水艦長調製ノ第二十六潜水艦沈没事件報告ハ事實ト相違ナキモノト認ム

(終)

海

軍

第二十六潜水艦沈没事件報告

第二十六潜水艦長心得 海軍大尉 河野 静雄

一、沈没前ノ状況

第二十六潜水艦ハ大正十二年十月二十九日海軍潜水學校教務トシテ津久根射場ニ於テ魚雷發射ヲ施行シ全日午後二時十分歸港吳港務部前潜水艦繫留浮標（S）ニ繫留ヲ終リ全二時三十分頃ヨリ先任乗組尉官ハ發射管員八名ヲ指揮シ全日ノ發射ニ於テ門扉故障ノ爲メ頭部約一呎門扉後端ニ喰ヒ込ミ射山不能ノ儘三番發射管ニ殘留セシ魚雷拔出作業ニ從事セリ該作業ハ先ツ一番三番補助水罐、前部釣合水罐ノ一部及艦内一番主水罐ヲ排水シ艦前部ノ吃水ヲ減セシメ前部六十噸汚水唧筒ヲ以テ發射管内ノ海水ヲ排除シ發射管後部ノ海水全部ヲ排出シタル後猶短時間唧筒ヲ作動セシメ魚雷後方ノ空氣壓力ヲ減シ暫ク其ノ狀況ヲ檢シ魚雷後方ニ推移セサレハ徐々ニ後扉ノ緊締螺ヲ緩メ浸水ノ模様ヲ檢シ安全ナルヲ確認セハ徐ニ後扉ヲ開キ更ニ魚雷及浸水ノ狀況ヲ檢シ差支ナキヲ認メハ全屏中央

ノ防水栓ヲ除去シ其ノ小孔（徑十二釐）ヨリ少索ヲ導キテ魚雷尾部ニ縛着シ後扉ヲ閉鎖セル儘魚雷ヲ發射管内ノ定位ニ復セシムル計畫ナリキ

當時在艦セルモノ先任乗組尉官。後任乗組尉官。中谷機關兵曹長及上久保一等機關兵曹以下下士官兵三十七名（右ノ外下士官兵二名母艇千代田ニ一名陸上ニアリ）ニシテ司令。艦長。乗組機關尉官ハ本隊各潜水艦繫留終了後母艇千代田ニ乘艇セリ

二、沈没ノ原因經過及所直

豫定ノ如ク艦内前部諸水罐ヲ排水シテ前部ノ吃水ヲ減セシメ（前部吃水ト一呎半）前扉ヲ以テ魚雷頭部ヲ強壓シ維持針ヲ出シ前部六十噸汚水唧筒ヲ以テ發射管内ノ海水ヲ排除シ發射管後部ノ海水全部排出セラレタル後更ニ約十五分間後扉閉鎖ノ儘唧筒ヲ作動セシメ管内ノ狀況ニ注意シ魚雷ノ後退セサルヲ確認シ徐々ニ緊締螺ヲ緩メ浸水ノ狀況ヲ檢シタルニ其ノ量極メテ少量ナリシヲ以テ之ヲ半開シ魚雷ノ狀況ヲ檢シタルニ約一米前進ノ位置ニ留マリ居レリ尚約五分間後

扉閉鎖準備ヲナシテ注意シタルニ異狀ナキヲ以テ安全ト認メ後扉ヲ全開シ魚雷
推進器止メ押入ノ準備ヲナシツ、アル際午後三時二分魚雷ハ突然急速度ヲ以テ
後方ニ移 動シテ管外ニ出テ海水ハ發射管口ヨリ奔入セリ依テ後部六十噸汚水
唧筒ノ發動及防水扉閉鎖ノ令ヲ下ス
前部作業員ハ直チニ前後扉ヲ閉鎖セントシテ後扉ハ五名ニテ極力之レニ當リ略
閉鎖セシモ緊締驟ヲ懸ケ得ルニ至ラズ海水間隙ヨリ激シク浸入ス前扉ハ二名ニ
テ極力努メタルモ閉鎖セラレズ艦俯角ノ爲作業場ハ浸水約三呎ニ及ビ作業困難
トナリ海水ハ發射管室ヨリ士官室ニ浸入スルニ至リ海水浸入防止ノ見込ナキヲ
以テ前後扉閉鎖ヲ斷念シ第一區ニ移リ第一防水扉ヲ閉鎖セント努メタルモ後扉
全開ノ爲浸水頓ニ加ハリ且ツ諸浮流物ニ妨ケラレ作業困難ヲ極メ漸ク間隙一時
位迄ニ閉鎖セントキ海水已ニ胸ニ及ビ「クローリン」瓦斯ヲ感シ前部昇降口ヨ
リ浸水スルニ至リ艦首次第二沈下シテ全ク危險状態トナリシヲ以テ「總員上ハ」
ヲ令ス（此ノ時迄艦長不在先任乗組尉官指揮ス）

浸水増加ト共ニ漏電甚クナリシヲ以テ「メーンスイツチ」ハ切斷セリ
艦ノ浸水傾斜ヲ千代出上甲板ニ於テ目撃セシ全艇當番ノ疾呼ニ應シ司令。艦長及
乗組機關尉官ハ舷門横付中ノ帆布艇及迫船ニ依リ現場ニ急行乗艦ス（浸水後八分
乃至十分）「總員上ヘ」ノ令ニ依リ前部作業員ハ前部昇降口ヨリ中部作業員ハ司
令塔昇降口。後部作業員ハ機械室昇降口ヨリ上甲板ニ出ツ浸水ト共ニ前方傾斜次
第二加ハリテ木々中部作業員ノ出テ終ラサルニ海水ハ已ニ全昇降口ヨリ浸人セリ
此ノ時艦ノ傾斜俯角約十五度ニシテ海水略々機械室昇降口ニ達ス各昇降口共最後
ノ兩三名ハ浸水ノ爲メ上甲板ニ出ツルコト困難ニシテ上方ヨリ引上ケ漸ク出スヲ
得タル狀況ナリキ

艦内ニ浸水シ始メタルハ午后三時二分ニシテ全乗員上甲板ニ出テ最後ニ機械室昇
降口ヲ閉鎖セシハ全三時十六分ナリ總員上甲板ニ出ツルヲ俟テ人員調ヲナシ異狀
ナキヲ確メ得タリ艦尾沈下ト共ニ艦ハ刻々危険ニ瀕スルヲ以テ司令ノ指示ニヨ
リ全三時十八分退去救助艇ニ移乗ヲ命ス爾後浸水益々加ハリ全三時二十三分艦尾

水中ニ没ス

艦内浸水ヲ始メ危急ニ瀕スルヲ見テ鎮守府ニ報告(二十七潜水艦ヨリ信號)ス
ルト共ニ工廠起重機ノ救助ヲ求ム(二十五潜水艦ヨリ信號)(午後三時七分)

三、沈没後ノ狀況

(一) 艦外ノ狀況

艦ハ繫留ノ儘(艦首繫留索一 艦尾繫留索兩舷各一)着底シ前後略々水平ニシテ左舷ニ約十五

度傾斜シ第一第二潛望鏡頂及信號橋頭ヲ水面ニ露出ス(干潮時潛望鏡頂露出八

呎八吋)附近海底ハ泥質ニシテ五呎乃至六呎(干潮時司令塔附近水深三十呎)ナリ

沈没後司令塔昇降口及機械室昇降口附近ヨリ盛ニ氣泡出テ午後六時五十分頃迄

繼續ス氣泡略々停止スル頃ヨリ司令塔附近及艦ノ前後數ヶ所ヨリ重油海面ニ浮

出シ翌朝迄繼續セリ

(二) 艦内ノ狀況

艦内防水扉ハ第二區第三區間ハ確實ニ密閉シ全隔壁ハ通風管隔壁弁モ確實ニ閉

鎖セリ（本防水扉閉鎖ノ爲前部ヨリノ浸水阻止セラレ後部ノ沈下ニ若干ノ餘裕ヲ生シ全員無事上甲板ニ出ツルヲ得タルモノト認ム）其ノ他ノ防水扉ハ閉鎖セルモ密閉確實ナラス

各昇降口防水蓋ハ外方ヨリ閉鎖セルモ外方ヨリノ緊締装置ナキ爲メ密閉セラレ居ラス

諸「タンク」ノ狀況

名	稱	狀	況
一番乃至五番	「メインタンク」	空	虛
六番	「メインタンク」	滿	水
艦内一番二番	「メインタンク」	空	虛
六番補助	「タンク」	海水	「トシ」
右以外補助	「タンク」	空	虛
前部釣合	「タンク」	海水	「トシ」

後部釣合「タンク」	海水一、八「トン」
左右浮力「タンク」	空 虚
魚雷周圍「タンク」	一乃至四番満水五、六番空虚
一番眞水「タンク」	眞水一、五「トン」
二番眞水「タンク」	満 水
蒸溜水「タンク」	空 虚
一番乃至三番重油「タンク」	海 水 満 水
四番乃至九番重油「タンク」	重 油 満 油
十番重油「タンク」	重 油二、「トン」海水補給ナシ
十一番重油「タンク」	重油二、二「トン」海水補給ナシ
十二番乃至十五番重油「タンク」	海 水 満 水
十六、十七番重油「タンク」	空 虚
潤滑油「タンク」	潤滑油二、「トン」

三乗員

死傷者ナシ

四、沈没後ノ所置

第二十五、第二十七潜水艦ニ各艦氣蓄器ノ全裝架ヲ依頼ス（午后三時二十七分）
 乗員ヲ第二十五潜水艦ニ移シ舟艇ヲ以テ沈没附近ノ海面ヲ警戒ス
 出中港務部長救難隊指揮官トシテ來場ス（午后三時二十八分）
 司令事件報告ノ爲メ鎮守府ニ出頭ス（午后三時三十分）

附記

司令	海軍中佐	朝枝三藏
艦長	海軍大尉	河野静雄
先任乗組尉官	海軍大尉	緒方勉
後任乗組尉官	海軍中尉	杉浦矩郎
乗組機関尉官	海軍機関中尉	伊勢貞良

海軍

乗組機働兵曹長

海軍機働兵曹長

中谷竹治

(終)

1143